



近野物語



川崎ゆきお

妖怪をよく見るという老人を妖怪博士が訪ねた。草深い田舎で、そこなら出そうな雰囲気でした。

その田舎へ行く前、妖怪博士は柳田国男の「遠野物語」を読んでいた。妖怪がうじゃうじゃ出てくる本で、妖怪博士はとてもではないが、信じられなかった。若い頃、この本を読んだときは、眠くて眠くて仕方がなかった。あり得ないことがつづられているからだ。そして、その正体が何だったのは放り出したままだ。

しかし、年を経てから読み返してみると、山奥ではそういった怪異があったかもしれない。また、リアルで残虐なこと、悲惨なことがあったとき、それを怪異談に託して残したのではないかと。

だから、河童などは嬰兒ではないかと考えた。そこまでいくと、暢気な話ではなくなるのだが。

さて、山暮らしのその老人は、もう里に降りてきて、野良仕事などしながら余生を送っていた。

「夏草が伸び放題のとき、妖怪も出放題でろう」

老人はいきなり語りだした。

「草場の陰で……ちゅう、言葉がありましよう。亡くなった人が、残した家族や、恩人を見守るとかね」

「はい」

「その草葉の陰が、もうあなた妖怪だらけ」

「ほう」

妖怪博士は、当然ここで、眉に唾を何度もつけた。

「あれはサツマイモを大きゆうしたような妖怪でな。イモロクと読んでおったなあ。夏草は青い。イモは茶色い。だから、よう見えた」

「そのイモロクは何をする妖怪ですか」

「だから、草場の陰からのぞく妖怪じゃがな」

「一匹ですか」

「いや、カボチャのような丸いのもおる。これは背が低い。たまに躓くことがある」

「それは本当のカボチャなのでは」

「いや、足があり、動く」

「あ、はい」

「古寺があって、その前の草むらにもイナゴやバッタに似た妖怪が、わんさとおる。これは、そこに分けいらんと出ん。さっと飛び出す」

「それも本当のイナゴやバッタじゃないのですか」

「いや、頭が大きいし、人の顔じゃ。まだまだ、一杯出よる。大勢、沢山出よる」

「はい」

「夜など、蚊の妖怪がウンカのごとく飛び乱れておる」

「それは出すぎでは」

「ああ、しかし、最近見えんようになったのう」

「どうしてでしょうか」

「目が悪くなつてのう。よう見えんからかもしれん」

妖怪博士は、これ以上聞いても、似たようなものなので、引き上げることにした。

老人が嘘をついているとは思えない。見えないものが見える能力がある人とは思えない。

妖怪博士は、この老人の話をまとめて「近野物語」でも書こうと思っていたのだが、この老人、少しやりすぎだ。聞いた話ならいいが、全部自分が見た話だ。それほど多く見られるわけではない。

しかし、この草深い田舎町で、イモロクの話は他の人も言っている。

きつとこの老人が広めたものだろう。

帰ってから妖怪博士は、知り合いの編集者にこの話を持ち込んだが、返答はなかった。

了